

\*\*\*\*\*

## 京教自然愛好家の集い Lon

\*\*\*\*\*

### 第1章 プロジェクトの概要

#### 1. プロジェクトの名称・目的

##### 1.1. プロジェクト名称

京教自然愛好家の集い Lon

##### 1.2. 目的

今日では豊かな自然環境に触れる機会が減少している。一方で京都教育大学の構内には様々な自然がある。しかしその自然に目を留める者は少ないのが現状である。

このように豊かな自然がありながら見過ごされていることは大変勿体のないことであると考えた。

また、近年では子どもたちが自由に触れたり遊んだりすることのできる自然環境が少なくなっている。

そのため、京都教育大学の自然を利用した教材づくり、展示等を行い、学内外に向けて京都教育大学の魅力を発信していき、多くの人々に学内の、そして自分の身の回りの自然に関心を持ってもらうことを目的とする。

#### 2. 代表者および構成員

・代表者

佐藤 隆亮 理科領域専攻 4 回生

・構成員

徳永 壮佑 理科領域専攻 4 回生

長尾 健治 理科領域専攻 4 回生

深津 勇斗 理科領域専攻 4 回生

宮元 延祥 幼児教育専攻 2 回生

### 3. 助言教員

藤浪 理恵子 先生 (理学科)

### 4. 協力者

今井 健介 先生 (理学科)

田中 里志 先生 (理学科)

川田 文乃 先生 (洛南高等学校附属小学校)

### 第2章 活動内容

#### 1. 活動期間

令和元年 5 月～1 月

#### 2. 年間活動

時期	活動
9～11 月	学園祭教室企画の準備
11 月中旬	室内植物園 開催
11～12 月	洛南高等学校附属小学校での出前授業の準備
12 月中旬	同小学校での出前授業実施

### 第3章 主な活動内容

#### 1. 室内植物園 (学園祭教室企画)

目的) 植物や動物と触れ合う活動を通して自然の持つ面白さを感じ、親しんでもらう。

本企画は、児童・生徒及びその保護者等を対象として令和元年 1 1 月の京都教育大学学園祭「藤陵祭」の教室企画として開催した。2 号館 D 棟 D5 教室を使用して、1 1 月 9 日と 1 0 日の 2 日間催した。

教室を植物園に見立て、室内を緑色ビニールシートで緑色にし、「植物園」の雰囲気表現した。すべて京都教育大学内の動植物を使用した、主に体験型の展示を複数設置した。また、入り口では、作成したオリジナルのチケットを配布した

展示内容は以下のとおりである。

#### ● 写真展示

京都教育大学の動植物などを撮影し

た写真を A4 用紙に印刷、ラミネート加工したものを教室の東側の壁一面に貼りだした。

- モイストポプリ

瓶に花卉と食塩を層状に交互に重ねて入れ、花の香りを保存したモイストポプリを作り、受付に置いて来場時に匂いを楽しんでもらった。学内のキンモクセイとヒイラギモクセイの2種類の花を使用し、香りを比較できるようにした。

- 振ると泡立つ木の実

学内のセンダン、ムクロジおよびクロガネモチの木の実を使用した。これらは、サポニン（石鹼に通じる成分）を含む果実である。これらの果実を水の入ったペットボトルに入れて振ると泡が立つ。これを展示し、実際に振って泡を立てる体験を通して、植物の持つ洗剤成分を視覚的に認識できるようにした。

- 木の実ブラックボックス

壁に貼った木の実の写真と、中の見えない箱に入った木の実の感触を比較して、名前を当てるゲーム。手触りの異なる複数の木の実を使用し、「触れる」という体験を子どもたちにしてもらいたいという思いから考案した。

- チャンチンモドキスタンプ

チャンチンモドキの木の実の核を半分に切ってつくったスタンプを使い、3種類の色を押せるようにした。入園券にスタンプ欄を設け、誰もが気兼ねなく体験できるよう工夫した。また、白紙の紙を用意し、自由なスタンプ作品を作れるようにした。

- 落ち葉のプール

学内から集めてきた落ち葉をビニールプールに入れ、棒などで落ち葉をつつけるようにした。落ち葉の中に多くの昆虫などが生活していることを学ぶことができる考えた。

- 映像・音声展示

植物等を紹介しながら学内を廻る 20 分程度の動画を作成し、教室内の TV で放映した。また、様々な天候、時間帯で録音した、学内に響き渡る小鳥の声や雨の音、木々がこすれる音などをスピーカーで流した。

- 自然のマップ

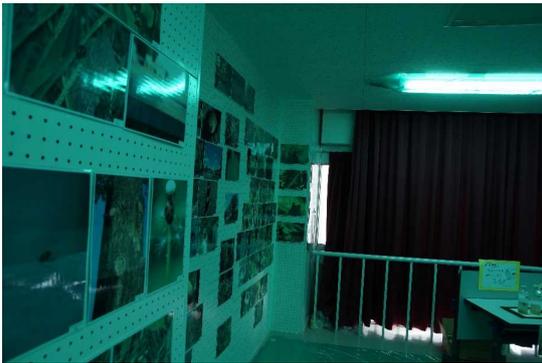
学内の主要な植物の場所を記した地図を掲示し、先に述べた映像と見比べることができるようにし、また学園祭をまわる際にも展示にあった植物を探すことができる考えた。

- カイノキの葉のしおり

カイノキの小葉の押し葉にラミネート加工を施して葉を作成した。カイノキは「学問の木」とも呼ばれているため縁起がいいと考え、葉は来園者へのお土産とした。

また、外部への告知活動として、附属桃山小学校及び洛南高等学校附属小学校に向けてチラシ等を配布した。

## ↓展示の風景



## 2. 洛南高等学校附属小学校での出前授業

(目的) 普段自然と触れ合う機会の少ない都会に住む子どもたちに植物の不思議や神秘を、体験を通して感じてもらう。

令和元年12月18日に、洛南高等学校附属小学校第3学年(3クラス90名)を対象として特別授業を行った。

本授業のテーマは、「木の実スタンプを使ってクリスマスカードを作ろう」である。クリスマスが一週間後ということで、本テーマを選んだ。各クラス1時限45分間を使い、チャンチンモドキスタンプと色ペン等を用いてクリスマスカードの作成を行った。

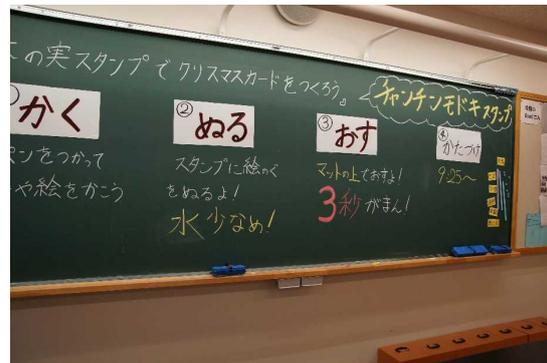
プロジェクト構成員3名で授業に臨み、各々1クラスの授業を担当した。事前に行った打ち合わせで、後片付けには10分程度必要であるとわかっていたため、実質的な活動時間を35分と考えて授業を構成した。授業は、①自己紹介、②作業説明、③実際の作業、

④後片付けの順で行った。

実際の作業は次に示した通りである。まず、ハガキ大のケント紙に色ペン等でメッセージや絵を書く。続いて、絵の具を筆につけ(水はごく少量)スタンプに塗り付ける。ケント紙を印マットの上に置き、絵の具のついたスタンプを3秒間押し付ける。これを最大5色の色を使って行い、クリスマスカードを完成させた。使用したスタンプは記念品として児童一人に一つプレゼントした。

また、前後の時間を使って、字の書けるトラヨウの葉のように面白い植物がたくさんあることを伝えた。

## ↓授業の様子



## ↓児童の作品



## 第4章 成果

### 1. 室内植物園

11月9日の来場者は64人、10日の来場者は85人を記録した。特に、洛南高等学校附属小学校と京都教育大学附属桃山小学校からは多くの親子連れが来ており、広報活動の効果を実感した。また、通りかかった近隣の児童クラブの子どもたちの来場もあった。本年度の学園祭は例年と比べて来場者が非常に少なかったといわれている（学園祭実行委員談）。また、使用したD5教室は正門から最も遠いD棟の離れにあり、訪れにくい場所である。しかし、この悪条件の中、2日で150名もの方に来てもらえたことは我々の展示がよいものであったからではないだろうか。

また、子どもたちはスタンプや泡立つ木の実、木の実ブラックボックスなどの体験型展示に大いに興味を示しているようであった。保護者の方々にも泡立つ木の実は興味深かったようだ。写真にも興味を示してもらえた。

さらに、「楽しかった」、「普通」、「楽しくなかった」の3段階評価をしてもらった結果、ほぼ100%の来園者に「楽しかった」と評価して頂いた。これらのことから、本展示の目的は最低限達成できたと思われる。

### 2. 洛南高等学校附属小学校での出前授業

クリスマス前ということもあり、活動はどのクラスでも大変盛り上がった。チャンチンモドキスタンプを使用する際も、どの色が

よいかじっくり考えながら、スタンプの特徴的な形にも興味を持ってもらえた。学園祭での展示を経験した児童もいたが、非常に楽しげに活動をしていたため、展示とは異なった方向性で京都教育大学の自然について児童たちに伝えることができたと考える。

本授業は、45分という大変限られた時間ではあったが、大きな問題なく執り行うことができた。これは、事前から洛南高等学校附属小学校の先生方との打ち合わせなどを重ねてきたことが重要な役割を果たしていたと考える。また、先生方には当日のサポートもしていただき、人と人とのつながりが活動にとって重要であるということを再認識した。

## 第5章 反省と今後の課題

### 1. 反省点

前年度の反省から、外部への告知やSNSの活用などに取り組んだが、フォロワー数を大きく増やすことは難しく、後方の手法についてはさらに考える必要がある。また、イベントの告知をはじめとした外部の小中学校との関わる機会を設けられなかったため、今年度はメンバーのゆかりのある学校としかかわりを持つことができなかった。そのため今後は地域との連携を深めていく必要がある。

また、人手不足という点では2回生1名を新たにメンバーに加えての活動を行うことができ、企画開催直前の準備活動に関しては昨年度よりはスムーズに行うことができた。一方で、企画の細部を詰めることが直前となってしまう、準備や物品の購入がギリギリの状態となってしまう、当日夜遅くまで準備をすることになってしまったことが問題であった。主要メンバーが4回生ということも、それぞれの進路に向けた活動や卒業研究があり、早期から積極的に活動するということが難しくなってしまった。

状況を早めに確認し、それに向けた取り組みを行っていくことが大切であることを痛感

した。

## 2. 今後に向けて

昨年度の活動で大きな課題であった広報活動を行い、積極的に外部へ活動を行うことができたという点は大きく進歩したといえる。

学外の学校等とかかわりを持てたことで、多くの人々に自然の魅力を伝えることができた。

しかし、外部とのかかわりを強めていくということは、より大きな責任を持つということでもある。今年度では多くの活動において準備を完了させるのが実施の直前になってしまったことが大きな問題であった。ゆえに、余裕を持ったスケジュール管理、早めの行動開始といったことに気を付けていく必要がある。

他方、広報活動は、これをきっかけに多くの方々に来ていただくことができたため、今後も継続していきたい。今年度の活動で得られたつながりをこれからも活かしていきたい。

また、同様に昨年度の課題であった活動人員の確保については引き続いて考えていく必要がある。今年度の活動は学外に向けたものが中心となったため、本学の学生へのアピールは十分ではなかった。本学の学生にも自然に興味を持ってもらうということは、京都教育大学に生きる者として大学への理解を進めるとともに、教員等になった際に子どもたちに自然をより良く教えられることから、本学大学生に向けた活動を行うことも考えなければならない。学内に向けた活動を行うことによって、「京教の自然のおもしろさ」に気づく同志を作っていく活動が必要なのである。